

# 平成 26 年度 胎内市国語部 活動報告

部長 藤原 麻子

## 1 研究主題 児童・生徒の国語力向上のための指導の在り方をさぐる

### 2 研究内容の概要

- (1) 第1回部会 「事業計画の立案」 会場 きのと小学校 15:30～ 参加者 16人  
(2) 第2回部会 「講演会」 会場 きのと小学校 9:30～ 参加者 11人

① 講演 「児童・生徒の国語力向上のための指導の在り方を探る」

② 指導者 胎内市立中条小学校 津野 航 教諭

③ 概略 「読みの観点」をベースにした津野教諭の実践より

・ 思考する力や話し合う力

場当たりの指導で身に付くものではないが、国語の授業で繰り返し使うことにより、児童生徒には、螺旋的に高まっていくものである。(全国学力・学習状況調査の問題を参加者が実際に解き、思考する場面・言語活動場面が問われていることを実感した。)

・ 国語授業の改善方向

身に付けさせたい力に着目する。児童・生徒が思考するときの言葉に着目し、思考する国語の授業をつくらなくてはいけない。継続的・螺旋的・発展的な学習にする。

・ 目指す授業

根拠を語る必然のある発問…AかBかの発問 討論的な話し合いになる発問

系統的に高まっていることが実感できる学習…「読みの観点」を使って螺旋的に取り組む。

学びで獲得した力を自分の言葉でまとめる過程の重視…日常的に書かせる。

- (3) 第3回部会 「授業研究会」 会場 中条小学校 13:55～ 参加者 20人

① 授業者 津野 航 教諭 (中条小学校)

② 単元名 作品の世界を深く味わおう

(教材名) 「やまなし・イーハトーブの夢」(光村図書6年)

③ 目標

表現の効果を感じながら場面の様子をとらえ、作品主題をとらえることができる。

④ 協議会の記録

・ 題名の検討は有効であった。考える視点が明確になった。『「やまなし」ではなく、「かわせみ」ではだめなのか』を児童に問うことで、宮沢賢治の「やまなし」に込めた思いを読み取らせることができた。

・ 二択の発問は有効であった。児童が「頭括型」で書くことに慣れており、ノートに自分の考えをしっかりと書いていた。

・ 「読みの観点」を継続してきたことで、児童が自分で物語を読み取る力が育っている。

・ 児童から出された考えを板書する際、これまでに出された意見と新たなものを書く必要があったのではないかと考えた。考えることと話し合うことの関連性をより明確にするためにも、教師が見取った考えを順に発表させるのではなく、「つけ足し」「反対」など、自由な話し合いがあってもよかった。



### 3 成果と課題

#### (1) 成果

8月の研修では、津野教諭がこれまで実践を積み重ねてきた「読みの観点」について理解を深めた。さらに、10月の授業研究では、津野教諭自身の授業公開を行い、国語部員が実際に参観し認識を深めることができた。2回の研修を通し、小中連携の下、継続的かつ螺旋的に積み重ねていく国語力の育成について、充実した研修を行うことができた。

#### (2) 課題

小学校卒業までにどれだけの力を付けて中学校へ送り出せるか、また、中学校では、小学校で培ってきた国語力をいかに継続し発展させられるか、小中連携の在り方について具体的な検討が必要である。